

DELANA MAZDRA/DISTINCTIVE
IMAGES PHOTOGRAPHY

Jean H. Jenkins
ジーン・H・ジェンキンス

ジェンキンス氏は、ワシントンDCにあるジョージタウン大学で中東研究を専攻し修士号を取得後、アメリカの主要報道機関の1つNBCテレビのカイロ支局で研修し、その後、ジャーナリストとして、中東各地を回っています。

約束された ベツレヘムの平和

The peaceful promise of Bethlehem



© RON CHAPPLE/INDEXOPEN.COM. DIGITAL ILLUSTRATION: YIVIANE STONOGA - DUEITO COMUNICAÇÃO.

アメリカ東部、フィラデルフィアの聖公会の祭司 フィリップス・ブルックス (Phillips Brooks) は、1865年に、聖地を訪れました。周りの丘からクリスマス・イブのベツレヘムを見て、その平安な情景に感銘を受け、その様子を書き留めました。それが、かの「ベツレヘムの小さな町」というクリスマスの賛美歌となったのです。歌詞の1番は次のようです：

ベツレヘムの町 静けき町
夢なき眠りに 星またたく
不滅のひかり かがやきて
すべての約束 今宵成れり
(キリスト教科学賛美歌 222)

希望と平和に満ちたこれらの言葉は、140年後の今日もなお、親しまれ、愛唱されています。しかし、今日のベツレヘムとその周辺の町々を思うとき、「希望」と「平和」という言葉は、すぐに心に浮かぶものではありません。その情景は、心を高揚させる調和よりも、醜い不和感を、祝福された許しよりも、残忍な復讐を、そして親しみある兄弟愛

よりも、激しい競争心を、思わせるものなのです。「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」という平和の約束、そして、不滅の光は、どこに見いだすことができるのでしょうか？

このような中東の不安定な状況について、新鮮な癒しをもたらす考えを求めて祈っていたところ、私は、聖書の中のバベルの塔の話の思い出しました(創世 11:1-9参照)。聖書によると、その時代まで、地球上の人々は全て同じ言葉と話していたということです。しかし、その後、人々は、偉大なるバベルの町を建設して、「その頂を天に届かせ」るほどの塔を建てます。聖書によると、彼らは、**神**を崇めるためにそれを造ったのではなく、むしろ自分たちを崇めるために造ったのでした。彼らの自尊心と物質主義のため、**神**は人々に異なる言語を話させ、互いに言葉が通じないようにさせた、と書かれています。その結果、混乱が生じて、人々は離散し、人類共通の身分が失われてしまいました。

このように分裂した人類の様相は、今日の中東になんと似ていることでしょうか。歴然

たる不正、経済格差、領土紛争、政治的対立、宗教的過激主義、そして残忍さ。中東の専門家たちは、このような事態が起こっていることについて、多くの複雑な人間的要因を挙げています。しかし、私たちが、形而上学的な視点に立つて問うことは、どうすれば「催眠術にかけられて惑わされているバベルの塔の意識を打ち破って、平和の約束に満ちたベツレヘムにたどり着くことができるか」ということです。

『科学と健康』で、メリー・ベーカー・エディは、バベルの霊的意味を、次のように説明しています：「自滅する誤り；王国が内内で分かれ争い、そして立ち行かないこと；物質的な知識」(p. 581)。もし、自尊心と物質主義が、**神**の子らを分裂させてしまったのならば、謙虚さと、思考の霊化が、癒しへの道であるに違いありません。そこで、私たちはまず、自分自身の身分と、同胞である全ての男性女性の身分について、どのように考えているのか、自問してみることが、出発点となるでしょう。

今日の世界において、中東ほど、人の身分について苦闘している所はないでしょう。

人間的な視点から見ると、共通の身分は、親近感、目的意識、そして安心感をもたらします。しかし、共通の目的や繋がりが感じられないと、分断や、紛争や、敵意さえ、生まれてしまうかもしれません。今日、中東においては、あの人はイスラム教徒だろうか、それともキリスト教徒だろうか？ スンニ派だろうか、シーア派だろうか？ イスラエル人だろうか、パレスチナ人だろうか？ アメリカ人だろうか、ヨーロッパ人だろうか？ アラブ人だろうか、トルコ人だろうか？ などという質問が、非常に重要な意味を持つのです。「あなたは誰ですか？」という質問が、非常に重要な結果、時には、生命を脅かす事態にまで及ぶことがあるのです。

しかし、こんな現実のなかにあつて、**キリスト教科学**は、真の意味で人々を一体にする共通の基盤を与えてくれます。この**科学**は、私たちは霊的であるため、みな愛あふれる、全能の**神**の子であることを教えます。私たちの真の兄弟愛は、誕生にまつわる事柄とは無関係なのです。むしろ、それは、深淵なる、不変なる私たちの身分、**真理**、**生命**、**愛**の反映であり表現である私たちの身分と、正に関係しているのです。ひどく分裂した状態の物質的な情景を越えて、共通の霊的な両親を持つという原点を、私たちは見据えることができるのです。そしてこれは、何か遠方にある可能性ではなく、常に現存する真実なのです。

私たちに共通のこの霊的生得権が、**キリスト・イエスの教え**の中に満ち満ちています。彼は、あるサマリア人の女性と井戸で出会ったとき、彼女がどんな背景を持つ人であるかとか、彼女の過去の行為などを越えて、彼女や彼女の隣人たちに、**神は霊**であり、私たち一人一人といつも共にあるという、より高度なメッセージを与えました(ヨハネ 4:1-26参照)。

イエスは、偉大な形而上学者でした、そして、彼は、自分の話を聞いている人々が、霊的実在が、「唯一」の実在であることを見いだすことを、そしてそれを実際に生きること、願いました。彼の教えは、非常に明確です:「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろ

う者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ。あなたの頬を打つ者にはほかの頬をも向けてやり... あなたの持ち物を奪う者からは取りもどそうとするな」(ルカ 6:27-30)。

イエスの教えは、いわゆる平和主義からは、かけ離れたものでした。むしろ、彼は、非常に深い意味において、行動派の人でした。エディ夫人はイエスを、次のように描写しています:「これまで地上を歩んだ人の中で、最も科学的な人であった。彼は事物の物質的な表面をつらぬいて、霊的な原因を見いだした」(『**科学と健康**』p.313)。エディ夫人はまた、イエスが、人類に与えた次のようなメッセージ、つまり、**神と人**(男性も女性も)は分離され得ないこと、それは、**原理**とその理念、**心**とその反映が分離され得ないのと同じである、ということ強調しました。

これは単なる理論ではありません。これはイエスが証明した実在であり、私たちもまたそれを証明するようにと、強く求めたのです。中東について祈るとき、物質的な事態の表面をつらぬき、**神と人**の揺るぎない一体性を進んで知覚しようとするなら、私たちの祈りは、新たな、より高い次元に至ることができます。

私自身、時折、立ち止まって、これらの基本的理念を、どれほど実生活で実証しているだろうか、と自問してみます。どのような理念を、心に抱いているだろうか、と考えてみるのです。時には、「私たち対あの人たち」という構図を画いているのではないだろうか？ また、ニュースで、イラクやイスラエルでの爆破事件について聞くと、事件が「遠いかなたの地」で起こっているのを助かった、感謝する、などと考えてしまわないだろうか？ 何時でも、どこにあつても、全人類が平和にあることを、祈るべきなのにです。また、ある人々は、他の人々よりも、暴力にさらされ易いと信じてしまい、悪に足場を与えてしまつてはいないだろうか、本当は、私たちは誰でも、霊的で善であるから、暴力は、人についての嘘にすぎないのに。また、高慢になつて、私たちは、他の人たち

よりも、賢明で、善意のもとに行動していると、考えてしまうことはないだろうか、全ての人が知恵と善意を備えていることを、あくまでも主張すべきなのに。このように人々を分断して考えることが、知らぬ間に、間違つた道に導いてしまうのです。

キリスト・イエスは、人類のあらゆる不和に関する真の解決策は、私たち皆の霊的身分と、**神**との一体性を、より深く理解することであることを、明言し、実証しました。**神**との関係を確信していることが、戦争をも引き起こす、闘争心や恐怖心から、私たちを自由にしてくれます。とげを持つ人間的思考は、人を傷つけ、分断させようとしませんが、それは、神性の**愛**の光のなかで、溶け去ってしまいます。メリー・ベーカー・エディは次のように書いています:「忍耐強い**神**に、忍耐強く従い、**愛**の普遍的な溶剤で、石のように堅い誤り—すなわち我意、自己弁護、自己愛—を、溶かしてしまうように努力しよう、これらの誤りは、霊性に向かって戦いをいどむもので、罪と死の法則なのである」(『**科学と健康**』、p.242)。

この戦いにおいて、私たちはどちら側に立って戦っているのでしょうか？ 自尊心、物質主義、そしてバベルに表わされた分断を受け入れているのでしょうか？ それとも、平和、兄弟愛、そしてベツレヘムに約束された「不滅の光」に、自らの意識の扉を開いているのでしょうか？ ✨